

地域資源を活かした主体的、対話的な鑑賞教育の実践

— 高等学校における鑑賞教育の環境作り —

中村七海

京都府立嵯峨野高等学校

1. はじめに

京都府立嵯峨野高等学校は全教科において探究活動を設定しており、芸術科では京都市立芸術大学日本画教授の川嶋渉氏との連携授業として地域の文化資源に根差した「京の文化財」という探究活動を設定した。

2年生18人、週に2時間、1年間の授業である。生徒は3~4人を1グループとして「文化財における本物と偽物の違い」や、海外のお客様の京都理解の一助となるよう、「京都弁（文化）の英訳冊子」を作るなど様々なテーマを設定し、探究活動を行った。また、3年次には他教科の探究活動と合同で、お互いに英語でのプレゼンを行った。

本研究は平成30年度の1テーマである「学校の茶室“里仁軒”を文化財に登録するプロセスから体験的に文化財について学ぶ」という題材に注目し、実践とその効果を検証していく。



図1 京都府立嵯峨野高等学校茶室「里仁軒」

2. 仮説

平成30年高等学校学習指導要領解説芸術編には改訂の趣旨、美術、工芸の課題として、「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深

め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められるところである。」^[1]

と記載されている。この内容を鑑みて、本研究はこれらの課題解決への実践を試みた。

まだ価値の定まっていない文化資源を主体的に鑑賞することで、情報化された既存の価値観への反応ではなく「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること」ができるのではないか。また、同じ物を見て異なる鑑賞をする生徒同士の対話の中から「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成する」ことができるのではないか。延いては既存の概念を脱却し、新たな価値観の創造が始まることを期待した。

3. 検証

(1) 環境づくり

鑑賞対象の情報が未知であるため、生徒の想像力と好奇心を自由に広げられる知的フィールドを確保することが主体的な鑑賞教育の要点だと考えた。生徒の疑問に幅広く対応できるよう、京都市立芸術大学、及び京都国立博物館と連携し、さらに学校の茶室“里仁軒”に関係する方々、寄進者矢代仁兵衛氏の孫である矢代一氏をはじめ、財団法人覚誉会、京都市国・登録有形文化財登録建築担当、校舎施工会社の竹中工務店など多方面に客観的観点から資料や御意見をいただけるよう環境を整えた。

また、京都国立博物館と特定非営利活動法人京都文化協会の協力を得て、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」(図2)と雪舟の「四季花鳥図屏風」(図3)、「天橋立図」(図4)の高精密等倍複製画を教材として生徒に提供し、学校図書館に展示した。生徒は本物とほとんど差のない複製画の鑑賞効果と、複製された

文化財の価値について鑑賞者へ問いかけ、技術の革新により新たな価値観が生まれつつある現状を紹介し、文化財への概念も変化していく可能性があることを示した。また、そのような時代の中で自分の価値観を持つ必要性を訴え、自分たちにとって、里仁軒にどのような価値があるのか、全校生徒に考えるきっかけを与えることに成功した。

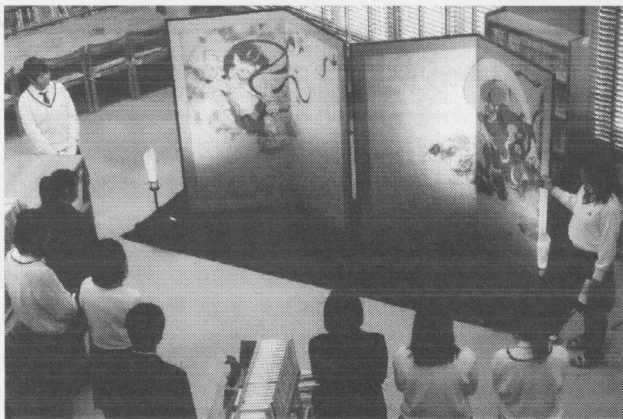


図 2

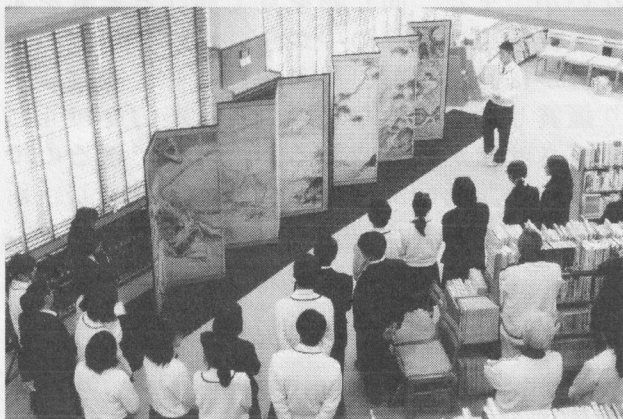


図 3



図 4

(2) 研究の実際

学校の茶室の文化財登録を目指す、鑑賞教育の課程を生徒自身の言葉で記載する。

『多くの方々の協力を得て、里仁軒に関する資料を集めた。自分たちで里仁軒の寸法を測り、製図をした。実際に文化財に登録されている茶室を見て参考にするため、高台寺の傘亭・時雨亭を訪れた。しかし、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の石川祐一氏に來校いただき、里仁軒の文化財登録の可能性についてうかがったが、情報不足、建築物としての特異性の有無等を含めた専門家による十分な所見が必要等の理由から現時点での文化財登録は難しいと判断された。

結果として、現時点では資料不足で里仁軒を登録する目標に到達しなかった。しかし私たちは、川嶋渉教授に助言をいただき「結論が出ているものだけが研究成果ではない」ということに気が付いた。そこで今わかっていることをまとめて、報告書を作成することにした。

報告書を作成することとは、今ある情報を後世に伝えていくということである。これがすなわち第一研究となる。報告書を作成するにあたって、近代建築に関する他の報告書を参考にし、そこから、普段は気が付かないが世の中には数多くの報告書が存在し、それらが今日の文化財登録の足がかりとなる第一研究になっていることに気がついた。

私たちは数多くの既存の文化財に身近に接することができるが、それらも初めから文化財として認識されていたわけではない。それらの価値は人々の努力によって付け足されていくのである。たとえるなら、ジグソーパズルのようなものである。私たちが見ている文化財の姿は、先人たちの努力で、すべてのピースが埋められ、額縁に飾られているパズルなのである。ご承知の通り、パズルは1ピース1ピース埋めていかなければ完成しない。この一つ一つのピースを埋めていく作業が文化財としての価値づけをしていくということである。私たちが作成したこの報告書は一つ目のピースになったと思う。気の遠くなりそうな作業の繰り返しは文化財になる唯一の道なのである。そのため、人の思いも不可欠で、文化財の価値に伴ってくるものだと思う。その点では、自分たちが文化財にしたいと動き始めた時点で里仁軒は価値を持ち始めていると言えるのではないだろうか。

私たちがやってきたこの一年間の軌跡こそが里仁軒が文化財となる第一歩となつたのではないだろうか。里仁軒には新たな発見がまだまだありそうだ。後学の徒が私たちの研究を引き継ぎ、里仁軒の新たな価値を見つけていって、いつか文化財となることを切に願う。』

(生徒論文「茶室記～子曰く、里は仁なるを美しと為す～」より一部抜粋)

(3) 生徒の変化

内閣府「文化に関する世論調査」(平成 28 年度)の設問を参考に、質問紙調査を行った。受講生徒の授業前と授業後の変化について比較する。

①「子どもの文化芸術の学びについて、何が重要だと思うか？(複数回答可)」

解答	授業前	授業後
学校における鑑賞体験の充実	47%	64%
学校における創作体験の充実	29%	35%
文化芸術の習い事の機会の充実	35%	29%
文化施設における鑑賞・学習機会の充実	41%	36%
地域に密着した伝統的な文化体験の機会の提供	47%	64%
歴史的背景など学習する機会の充実	53%	29%

②「文化芸術体験についてあなたが期待する効果は何か？(複数回答可)」

解答	授業前	授業後
国や地域に対する愛着を持つようになる	65%	86%
他国の人々や文化への関心が高まる	53%	86%
文化芸術活動を将来続けていくきっかけとなる	53%	36%
文化芸術の保存・継承に関心が高まる	29%	50%

本校は学習に対して肯定感の強い生徒も多い。よって①の結果を見ると、授業前は「学習の機会」が子どもの文化芸術の学びに重要だと考えていた割合が高い。しかし、授業後は学習の機会の充実よりも体験の機会の充実の方がより重要だと変化している。また、②の結果を見ると、この授業を通じて一切触れてこなかったにも関わらず、「他国の人々や文化への関心」が、自国への「国や地域に対する愛着」と共に高まっていることが伺えた。これはプレゼン資料を作るとき、自国の文化を他国の方へ伝えるには、言葉を訳するだけでは伝わらず、相手の文化との違いを考えたいうえで、理解しやすいように内容を工夫した事が影響したのだと考えられる。

4. 結論

多方面に多くの知識を習得しなければならない高校生の学習では、効率的に情報を処理することが大切であることは言うまでもない。しかし同時に、自己の感覚を駆使して、情報化されなかったものを実感的に理解することで、その学びはより深く、創造的に広がる可能性がある。この一年、美術教育の課題とされた「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等について」^[1]取り組んだ。生徒たちは頭で考えた仮説を体験的に確認することで、知識が経験として身体にブラッシュアップされ、新たな課題を見つける目を育み、さらなる仮説へと内容が更新されていく経験をした。また、仮説が間違っていた場合でも、実際に得た感覚から身体に蓄積された過去の経験を手繰り寄せ、お互いに持ち寄ることによって、より深い考察へと思考を進化させる経験もした。このような活動は、知識を享受する「学習」ではなく、新しい価値観を創造し提案する主体的な「学問」へと生徒の学びを成長させていく。

さらに、物の形が外からの圧力と内からの張力で初めて成り立つように、創造の内側と外側は表裏一体であり、地域に密着した文化財を考えることによって、自然とその外側である他国の人々や文化への関心が高まった。内と外を別物として対立的に比較し、学習するのではなく、その間を自分の目で見つめることが多文化共生時代を生きる生徒たちにとって重要な学びとなることは言うまでもない。生徒は生活の延長線上に文化を見据え、その外に広がる社会との間に新たな価値観を創造していった。この活動により、生徒自らが「美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成する」という美術教育の課題について、実践の一例を示したといえよう。

5. おわりに

年度末、地元の方にも知られていなかった学校の茶室と、文化財登録という目的を達成できなかった高校生の活動が、京都新聞の記

事(図5)に取り上げられ、地域の関心を集めた。研究自体への賞賛ではなく、生徒たちのひたむきな活動に対する、成長への期待が記事になったのだろう。このような地道な活動を取り上げてくださった新聞社と地域の方の暖かい見守りに、心より感謝したい。

最後にこの記事により、本研究の目的のズレが明らかになった事を今後の課題として記載しておく。この一年、本研究のテーマであった「高等学校における鑑賞教育の環境作り」とは、授業者である筆者が生徒に対して専門家の協力や特別な条件を整えることだと考えていた。しかしこの記事は、生徒の小さな取組が雪となって地域に落ち、高校の内から広がる波紋のように、外へ影響を与えられることを示している。生徒たちの学びは地域の学びにも繋がっていく。「高等学校における鑑賞教育の環境作り」とは筆者が考えていたような閉じた学内の環境のことでなく、学びを通じて生徒がゆるやかに地域を変えていく生涯学習の環境作りのことであった。今後はさらに大きな視野で、社会の中での高校教育を考え、新たな鑑賞教育の可能性を模索していきたい。

文 献

- [1] “高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽,美術,工芸,書道)編 音楽編 美術編”, 8頁, 文部科学省, 2018.

謝 辞

京都市立芸術大学川嶋渉教授に多大な御協力をいただきましたことに感謝申し上げます。また、生徒の活動にご支援、御協力いただいた全ての方々、地域の皆様に、心より感謝申し上げます。

*助成 2019年未来教育研究所

その他 研究等

「見る」とは何か
鑑賞にも発達段階があると仮説を立て、実践により生徒の変化を記録した。高等学校の鑑賞教育の目的はコミュニケーション能力の育成に留まっていてはならないと結論付け、美術教育として深い学びに繋がる鑑賞教育の可能性の一端を示した。
共同研究者
京都市立芸術大学教育学教授 横田学
日本画教授 川嶋渉
(2019年8月22日全国高等学校美術、工芸教育研究会
東京大会 口頭発表)

「手ごたえのありがたさ」
- 絵を描く行為と触覚のゆくえ -
見えているものを実際に確認する手段は触ることしかなく、人は生まれてから見て触ることを通じて、世界に自分を位置づけてきた。この研究では東洋文化を中心に触覚と表現の関係を紐解き、自己の日本画表現を实践として、表現と鑑賞における触覚の役割に言及した。
*ネット検索にて全文閲覧可
(博士論文 京都市立芸術大学リポジトリ)

「鑑賞 I」
実際に触って行う鑑賞や美術館での研修を通じて、鑑賞者と作品の関係を省察した。
*助成 京都教弘個人研究

2019年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」助成による未知を開くファシリテーター育成事業 研修生「聞こえないを聴く・見えないを視る CASE-1 霧の街のアーカイブ」
京都市立芸術大学



図 5 京都新聞 平成 31 年 2 月 27 日 第 22 面